

## door

---

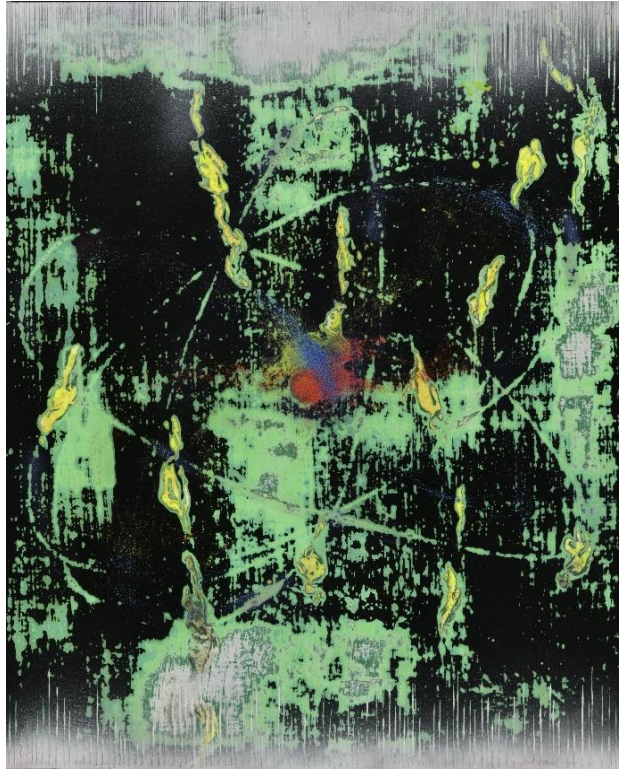
「未来」というものを考えると選択の連続で多くの扉が並んでいるようなものだと思います。いつものようなあまり変化のないものを選んで進むのか、それとも今まで見たこともない何かを感じる扉を開けるのか、その選択で訪れる未来は大なり小なり変化があるもののはずです。ただ場合によっては今まで選んだことのないようなものを選んでそれほど変わらないということもあるかもしれませんし、逆にいつも通りの扉を開いたつもりが思いもよらない状況に巡り合うかもしれません。

先のことは想像することは出来ても、大概その通りにはいかないし、未来の自分は不透明で霧がかかったような印象があります。

この作品が表すのは変化することへの肯定でも否定でもなく、未来の可能性の提示であってどの扉を開くかは自分の意志とタイミングであり、扉自体は無数に（色々な形で）存在しているということです。

人は扉を抜けた自分自身をはっきりと見ることや知ることは出来ません。少なくとも私にはそのような能力はありませんし、そんな能力があったらむしろ辛いでしょう。

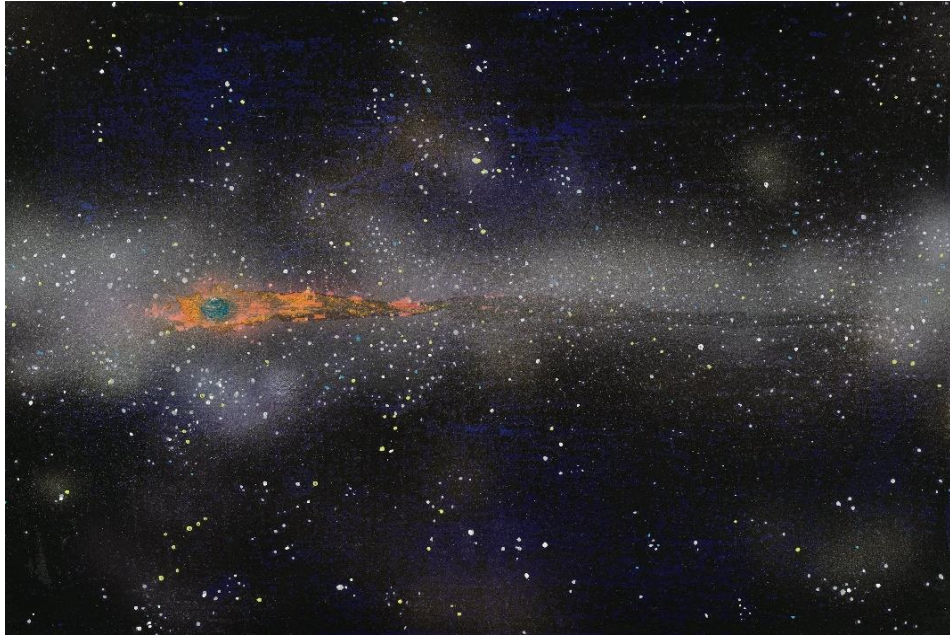
わからないからこそ、なんとか扉を開けて前に進めるんだと思います。



## 廻

---

まだ死んだことがないので死は未知のものです。誰もがそうはずです。  
ただ、古来より死生観は様々あって、死後の世界にも色々な表現があります。  
そもそも死後の世界があるかどうか明確にわかる人は多分いないでしょう。多分ですが。  
不信心な自分としては死後の世界や神様の姿が身近でなく、数多くあるストーリーの中の1つでしか  
ありません。  
ですのでそういった表現というよりは自然や科学的な考え方のほうが身近で受け入れやすいように  
思います。  
(ある種、それも宗教的は感覚なんだろうなとも思いますが)  
今自分として存在している構成物は日々死んでいき、他のものに形を変え、自分でない何かになっ  
ています。  
逆にさっき誰か、もしくは何かだった構成物が自分になっているとも言えます。  
そう考えると感知出来る世界全てが自分なんじゃないだろうか、とも思うわけです。  
すべてはぐるぐる廻っているのかもしれない。



## どこかで、多分

---

私はUFOを見たことがありません。

ただ、子供のころからUFOやネッシーなどの未確認なんたら類が好きで図書館でそういったものが載っている本をよく借りていました。

不思議なものに心を惹かれることは今ももちろんあります。が、時代も変わり、情報も技術も発達した今の世の中ではそれを信じるのがなんとなくできなくなっている自分がいることにも気づいているわけです。

大人になったから、ということもあるかもしれません。

そのことに日々日々つまらなさを感じることも実感としてある自分に少しがっかりしつつも、どこかで信じている自分もいるはずと思って制作した作品です。



## アカルイヨル

---

雪が降る夜は明るいのです。

皆が寝静まり、街頭くらいしか灯りがついていなくても仄かに。

そんな時に一人で外に出てみると、音も雪に取り込まれ、感覚がなんとなく狂い、なんとも言えない気持ちになります。

多分それは野外という広い空間にいるのに、狭い湯舟の中にいるような一人きりでぼつぼつと取り留めない考えが浮かんで消え、思い返しては忘れ、ということを繰り返す様な気分に近いかもしれません。



## 壁の花

---

花には様々なイメージがあり、多くの作家が制作してきた画題です。私自身、花の描かれた作品の中で好きなものも多くあります。

しかしながら、作品として花を描くのはおそらく初めてです。

浪人時代に苦手意識を持ってから未だに描けずにいました。

花自体に魅力を感じないわけではないのですが、どうしても「描く」対象として見る事が出来ず、10数年経ってしまいました。

ある種のトラウマかもしれません。

ですので、花を描く意味やメッセージはまだあまりありません。今まで制作してきた「幸福」というテーマに直結するようなモチーフではあるのですが手探りな状態です。これから切り開いていきたいテーマです。



## 赤ずきんちゃん

---

幼少期に読み聞かせをしてもらっていた絵本からのオマージュです。

この絵本が私の「絵」に対する原体験だったのだと思います。

これまで幸福を扱った作品を描いてきたきっかけはこの絵本の読み聞かせをもらっていた時間でした。

誰かと何かを共有する時間は何にも代えがたいと思い、その気持ちを制作の主軸に置き、ここ数年制作を行っています。

学生時代には赤ずきんに限らず、童話をモチーフした絵画作品を制作する機会がたびたびありましたが、立体の作品は初めてだったため、技術面もそうですがどの程度イメージを変換するかという部分でも試行錯誤がありました。

元のイメージや印象が強いため、その部分はあまり変えずに現在の自分の表現を積み重ねたものにしたと考え、この形に落ち着きました。